

各 位

2021年9月24日
株式会社リットーミュージック

下北沢からインディーズ・シーンを見続けてきた男が語る、音楽業界でのサバイバル術！ 『下北インディーズ社長 メジャーとは逆を行くインディー哲学』が9月25日に発刊。

インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）は、『下北インディーズ社長 メジャーとは逆を行くインディー哲学』を、2021年9月25日に発売します。



94年にインディーズ・レコード・レーベル「KOGA RECORDS」発足後、四半世紀に及び下北沢でインディーズ・シーンを見続けてきた古閑裕氏。

「KOGA RECORDS」は長い歴史の中で、個性的なアーティストの作品をリリースし続けてきたのと同様に、KEYTALK、SpecialThanks、そこに鳴る、といった人気アーティストを輩出したことでも知られています。

彼はどのような方法で、「KOGA RECORDS」をシーンを代表するレーベルに作り上げたのか？ また、決して上向きではない21世紀の音楽シーンで、なぜ27年にも渡りレーベルを続け、音楽業界で生き残れたのか？ そして、こういった着眼点でKEYTALKといったアーティストを発掘し、マネージャーとして成功へと導いたのか——？

それはメジャーとは逆を行く、インディー魂あふれる彼の哲学にありました。

本書は自身の自伝をベースに、音楽シーンでの成功／失敗エピソードが赤裸々に語られる一冊となっています。

インディーズ・シーンという、また違う視点から見た音楽業界。この世界に携わりたい方、必見です。

はじめに

東京の下北沢で、KOGA RECORDSというインディーズ・レーベルをやっている古閑裕です。ちなみにKOGAは「コガ」ではなく、一応、設立当初は「ケイオージーエー」と発音していたのですが、最近の若者はコガレーベルと言っていて、それが定着しているので呼び方はどちらでも構いませんが、この「はじめに」では、今の僕のことを簡単に話していこうと思います。

KOGA RECORDSを始めて、2021年でかれこれ27年になります。ちなみにレーベルと併せて、KEYTALKなどが所属するマネージメント会社もやっています。

四半世紀を越えてこんなインディーズ・レーベルを続けているので、僕のことを「下北インディーズ社長」と呼ぶ人もいます。ただ、コロナ禍以前は下北沢界隈で毎日のように飲み歩いていたので「下北の酔っぱらい社長」と呼ばれることもありましたが……。

最近是自己紹介で「KOGA RECORDSというインディーズ・レーベル

をやっています」と言っても、ボカーンとされることが多いです。そんなときは「KEYTALKの事務所の社長です」と言うようにしています。そうするとKEYTALKのネームバリューもあり、「ああ」とわかってもらえます。

でも、やっぱり僕は自分をインディーズ・レーベルをやっている人だと思っているから、KOGA RECORDSのオーナーですという話を必ず最初にするんですね。そうすると、「どんなバンドの音源をリリースしているんですか？」という話になるので、結局、KEYTALKの話になっちゃう(笑)。ただ、元々はデキシード・ザ・エモンズ、スクービードゥー、ロンロンクルーやジ・オートマテクス、ナンバガールの1stアルバム『SCHOOL GIRL BYE BYE』を出していたことを話す、そのあたりのバンドを知っている人は「そうなんですか」と驚いてくれることもあります。

レーベルとしてそれなりの長い歴史もあるし、その中でいろいろなジャンルのアーティストの音源を出してきたから、KOGA RECORDSを知っている人でもそれぞれが持つレーベルのイメージは違うつばいです。自分ではそこが面白いレーベルかなとは思っています。

はじめに

▲自身の自伝をもとに、悲喜こもごものエピソードが満載。

同じ年で、一番最初にジョージ・コックスのラバーソウルを履いたのは僕ですよ！
……なんて昔はよく自慢してたんですが、今思えばたぶん違うと思います（笑）。
でも熊本には売っていなかったんで、博多まで買いに行った記憶があります。

中学を卒業すると普通に高校に進学。受験勉強もそれなりにしましたし、親も
いい学校に行つてほしいという希望もあつたみたいなんですけど、僕が受験した熊
本第二高校はすごく頭がいいわけでもなく、悪いわけでもなく、要するに中間ぐ
らいだったんです。僕の偏見かもしれませんが、そういう学校って音楽好きがいっ
ぱいいるんですよ。だから同級生に、良い意味で音楽オタクみたいな奴らがたく
さんいて、そいつらと「セックス・ピストルズはもう終わつてい」^{※7}「これからは
ニューウェーブだ」^{※8}「パブリック・イメージ・リミテッドはカッコいい」^{※9}「パウハ
ウスを聴け」^{※10}「ポップ・グループを知ってるか」なんて話ばかりをしていました。
高校時代、僕は当時の熊本の女子高生にはまったくモテそうもない音楽を、ま
わりの友達と一緒に聴いていた。楽しい時代でした。

高校生の頃、そういった音楽情報は音楽誌から得ていました。その頃はまだイ
ンターネットなんてない時代ですよ。読んでいたのは、『FOOLS MATE』や
『DOLL』^{※11}、そして『宝島』^{※12}。『FOOLS MATE』は、雑誌のカラーがプログ
レッシブ・ロックからニューウェーブやオルタナティブ・ロックに変わった頃で、
その界限のバンドをたくさん紹介していました。
若干記憶が定かではありませんが、当時の『宝島』はフリクション、ジャガ
たら、スターリン、INU、セルダから、その後のインディーズにつながる
LAUGHIN' NOISE、THE WILARD、有頂天など、様々なタイプの
時代の最も尖った音楽を取り上げていたかと思えます。だから『宝島』を読んで、
東京への憧れを膨らませていました。この3誌が当時の僕にとってのバイブル。
特に『宝島』は発売日を楽しみにして、穴が空くほど読んでいました。

日本のロックも好きで、同じ九州である福岡のいわゆる「めんたいロック」^{※13}は、
もちろん完全にハマりまくりの聴きまくりでした。シーナ&ザ・ロケッツが一番
好きでした。熊本のライブはもちろん、福岡までひとり、もしくは友達とライブ
に足を運び終電で帰ってきたり。原付バイクで熊本、博多間を往復していた記憶
が蘇ります。

※6 パブリック・イメージ・リミテッド
セックス・ピストルズを脱退したジョン・ライドン（右）が、元クラッシュのキース・レヴィン（左）らと結成したバンド。略称はPIL。78年にデビュー作「パブリック・イメージ」を発表。それまでのパンクのイメージを払拭しようとした。そのサウンドは、ポスト・パンクの雛形となつた。92年に活動を休止したが、09年に再結成を果たした。

※7 パウハウス
79年にイギリスで結成。ゴッファ・ロックの先駆者であるサウンドで、聴く多くのパンクに影響を与えた。フロントマンのピーター・ダーフィンの愛するブルックリン・ストリートでも結成。そのガリスマン性から「ゴッパ」^{※14}という愛称を持つ。

※8 ポップ・グループ
79年イギリスで結成。ロック、パンク、ダブ、フリージャズなどを内包しながらサウンドが特徴的。

※9 FOOLS MATE
77年に福岡県東郷郡である北村島に於て結成された日本の音楽雑誌。創刊当初はフリクション、プログレッシブ・ロックを専門としていたが、ヤガクワラウド^{※15}、ロック・ニューウェーブといった当時の先鋭的な音楽の記事を中心に、ウイリアム・パロウズなどのサブカルチャーも取り扱う。12年12月発売の第376号をもって、紙媒体での発行を停止。

▲バンドやレーベルなど、専門的な用語には注釈テキストが付随します。



▲ディズニーとのコラボTシャツを着たKEYTALK。

ていたんですけど、この店に出入りしていたディズニーのグッズも扱っている業者さんを、僕に紹介してくれたことがきっかけ。2016年に最初のミッキーマウスとKEYTALKのコラボTシャツを作らせてもらうことができました。
それは表がミッキーマウス、裏がKEYTALKというデザインのTシャツ。ただこれは、表面と裏面に別々にプリントされているデザインなので、厳密に言えば、KEYTALKとディズニーがひとつのデザインの中間に落とされたいアイテムを作りたいと思っていました。そしてずっとその業者さんとディズニーに交渉を続け、5年がかりでついにオリジナルの原画を描き下ろしてもらうことができました。
それはミッキーマウスをはじめ、楽器を持っているディズニーのキャラクターたちが、KEYTALKのメンバーたちの特徴を捉えながら描かれているデザイン。これは画期的なことだと思います。ミュージシャンでほかにやれているのは、たぶん湘南乃風さんだけだと思います。
日本のポツと出の若手バンドが、あのディズニーと一緒になんて夢みたいな話じゃないですか。こういう施策や仕掛けは、マネージメントの醍醐味。僕もディ

▲自身が「親と息子のような関係」と語る KEYTALK とのエピソードは多数掲載。

東西インディーズ番長・スペシャル対談！

世の中がこんな状況なのに、THE NINTH APOLLOはイケイケに見える——古閑

——いろいろなところで聞かれていると思うんですが、このコロナ禍でレーベルなどはどんな状況でしょうか？

渡辺 まったく良いとは言える状態じゃないですね。この状況になってからやったことで、「あれが足りてなかった」「これをやれてよかった」など、見出したことはありましたけど。

古閑 僕がすごいと思うのは、世の中がこんな状況になつているのに、THE NINTH APOLLOはイケイケに見えるってことなんです。渡辺 「止まるよりは」っていう気持ちで動いているところはありますよね。我慢しながら何かやっている。

古閑 ちゃんと準備がしてあったというか……こういう状況になつても、すぐに動けるような体制になつていたのがすごいなって思う。それはレーベルを複数作つてたり、ライブ・ハウスを運営しているところもあるんだけど、新しい世代のレー

本書の締めくくりとして、大阪を拠点に数々の个性的なバンドをリリースし続けるインディーズ・レーベル、THE NINTH APOLLOを主宰する渡辺旭氏との対談をお届けする。東と西の「インディーズ・レーベルの雄」が激突するというスペシャルな顔合わせとなったが、気心知れた仲のふたりだけに話題はゆるめの展開に（笑）。しかし随所に、ふたりが思う「インディーズ論／レーベル論」が語られるなど、「東西インディーズ番長対談」にふさわしい内容になっているぞ。

東西インディーズ番長・ スペシャル対談！

聞き手：辻井恵



187

186

▲巻末には関西を代表するインディーズ・レーベル“THE NINTH APOLLO”の渡辺旭氏との対談も。

■書誌情報

書名：『下北インディーズ社長 メジャーとは逆を行くインディー哲学』

著者：古閑裕

定価：本体 1,800 円＋税

発売：2021年9月25日

発行：リットーミュージック

商品情報ページ <https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3120343007/>

CONTENTS

第1章 今の僕を形成した、ロックとの出会い

クイーンとミッシェル・ポルナレフ、これがロックの原体験／ファンレターが返ってきたことで、テープ・トリックへの一生の忠誠を誓う／世の中ではパンク・ロックが大流行。早速、髪の毛をパンク風に逆立てる／通い詰めたライブ・ハウス。僕にとってここは最高の場所

第2章 最高と最低を味わったヴィーナスペーター

一度つまづいたことで訪れた、東京の大学への進学／よく遊びよく飲んだ下北沢。僕はこの頃からこの街が大好き／一部上場の医療機器メーカーでサラリーマンに。だけど僕は音楽が忘れられなかった／外タレの前座で初ライブ、インディーズ・チャート1位。順風満帆で始まったヴィーナスペーター／トラットリ

アからメジャー・デビューを果たすも、3年半の活動でバンドは解散／バンドの解散で気づいた、人と人との繋がり大切さ／BEYONDSを始めとしたメロコア・シーンとの繋がり／人と繋がるのはライブ・ハウス。楽しくライブを観て、飲んでるだけだけど

第3章 カッコいい！ それを動機に始めた KOGA RECORDS

逆恨み、カッコいい、意地、それがレーベルを始めた理由／僕の大好きなバンドだけを集めた、レーベルの処女作となるオムニバス・アルバム／ぞくぞくと新作をリリースし、形作られていく KOGA RECORDS 像／「これ、ちゃんと会社にしないとやばくない？」そのひと言でレーベルを会社化／自分の予想の遙か上をいつてきたナンバーガールの『SCHOOL GIRL BYE BYE』／いいバンドを見つけても自分のレーベルで出せない。突如やってきた KOGA RECORDS 低迷期

4章 レーベルを支えたバンドーSpecialThanks、そして KEYTALK

そのステージを観て鳥肌が立った当時16歳の女の子／「古閑さんのところでお願いします!」。自分も想像しなかったまさかの言葉／KEYTALKの期待に応えるべく一大プロジェクトを展開／KEYTALKが新しい音を作り出すための、大きなきっかけとそこからの変化／「楽しいことをやろうぜ!」で始まった、YouTubeの『KEYTALK TV』／KEYTALKはファンに近い存在であり、ファンと一緒に楽しむというバンド／勉強することから始まった、KEYTALKのマネジメント業／危機管理よりも面白いことを! ちょっとした事件になった下北沢ゲリラ・ライブ／KEYTALKは下北沢に街ぐるみで育ててもらった／“KEYTALKの弟的”を脱却すべく Bentham に思うこと／そこに鳴るを聴いたときは、あまりに初体験のサウンドに驚いた／そこに鳴るで展開する KOGA RECORDS 流のインディーズ的手法

第5章 インディーズ魂あふれる古閑流レーベル論

バンドとレーベルの関係は、完全なフィフティフィフティが理想／コロナ禍の令和3年、今イチオシの新人バンドが、シンガーズハイと Aland／バンドとして、“あつ”と思えるものがあるか、それを重要視している／インディーズ・レーベルとお金の話／この時代にミュージシャンがレーベルや事務所に所属するメリットとは?／所属ミュージシャンとマネジメントの関係性

第6章 どうする? どうなる? KOGA RECORDSの未来

コロナ禍も含めて今後、ミュージシャンはどう活動していくべきか?／インディーズは順番待ち。やり続けていればいつか自分の番が回ってくる

東西インディーズ番長・スペシャル対談!

渡辺旭 (THE NINTH APOLLO) × 古閑裕 (KOGA RECORDS)

PROFILE

古閑裕 (こが ゆたか)

熊本県熊本市出身。明治大学政治経済学部経済学科卒業。有限会社マーガレット・ミュージック取締役社長、KOGA RECORDS 代表。90年代初頭に活躍したギター・ロック・バンド、ヴィーナスペーターのベーシストを経て、94年にインディ・レーベル KOGA RECORDS を設立。初期はデキシード・ザ・エモンズ、ナンバーガール、スクービードゥーなどをリリースしたことで名高く、近年は SpecialThanks、

KEYTALK、Benthamのほか、さらなる新しいアーティストも積極的に発掘しリリース。2013年KEYTALKのメジャー・デビューに伴いアーティスト・マネジメント部門をスタート。2015年レコーディングスタジオSTUDIO K5、2017年KOGA MILK BARを下北沢にオープンした。25年以上のインディ・レーベル活動で培ったノウハウを活かし、今なお、東京・下北沢を拠点に新しい音楽を発信し続けている。ROCKET Kというパワーポップ・パンク・バンドでも地道に活動中。大の酒好き。ラーメン好き。趣味はキック・ボクシング。

【株式会社リットーミュージック】 <https://www.rittor-music.co.jp/>

『ギター・マガジン』『サウンド&レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー&クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア&コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 Rittor Base」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やエンタメ情報サイト『耳マン』、Tシャツのオンデマンド販売サイト『TOD』等のWebサービスも人気です。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証1部9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「モバイルサービス」「学術・理工学」「旅・鉄道」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社リットーミュージック 広報担当 原見
Tel: 03-6837-4704 / E-mail: pr@rittor-music.co.jp